会長就任のご挨拶

長　滝　康　伸

この度，第30代粉体粉末冶金協会会長職を拝命いたしました長滝と申します．前任の尾崎会長が先導して推進してこられた三つの連携（国際，団体間，会員間）を，引き続き継承しつつ，当協会の活力をさらに高める施策を積極的に取り込み，運営していきたいと考えております．私自身は，鉄粉を商品として取り扱う鉄鋼メーカーの出身ですが，自動車用超高強度鋼板の研究開発を主体に従事してきたため，粉体材料に関わる経験は十分ではございません．関係各位のご助力を頂き，自身の経験も踏まえた視点も盛り込み，当協会の発展に貢献したいと考えています．会員皆様のご協力を賜れますよう，執行部とともに尽力して参りますので，よろしくお願いいたします．

さて，当協会は1958年設立という長い歴史を有し，今日の日本を築き上げた高度成長期の工業の発展を支えてきたことは言うまでもございません．日本は，人口減少期に差し掛かってきたとは言え，今後，数十年に渡って，1億人前後の人口で推移することを考えますと，工業競争力の維持・向上は，国際競争力や雇用維持の観点においても，引き続き日本における最重要テーマのひとつです．一方で，バブル崩壊，新興国の技術力向上，さらにはリーマンショックを経て，日本における従来型の大量生産型産業では，事業形態の実効的転換点に差し掛かっています．このような日本の産業の置かれている状況で，産官学が結集する学協会が果たす役割は，やはり「新しい科学技術の萌芽」に貢献することではないでしょうか．

必要なことは，現象の深堀，広い視野，新しい結合，と考えています．それぞれの理解は個々人で異なると思いますが，現象の深堀は，議論を深化させることであり，広い視野は，分野を横断した知的好奇心の醸成であり，新しい結合は，現象の本質を結びつけて，新しい研究や技術領域を発掘することや，これらに至るアイデアを思いつくこと，あるいは，セレンディピティ（偶然の幸運）に出会うことだと，私は理解しています．

当協会の強みは，無機・有機を問わず，実に多様な材料や，関連するプロセス技術が，粉体あるいは焼結というキーワードを元に，一同に会することができる点であり，事実，自身が初めて参加した講演大会の場でも，驚きに似た感覚を覚えた記憶があります．そういう意味では，当協会は「新しい科学技術の萌芽」に必要かつ十分な要素を備えているのだと確信しております．

懸案事項とされ昨年度完了した分科会の再編は，時代により変化してきた研究・技術領域を再整理することで，議論の深化を促すアクションでありますし，連携は，視野を広げて，新しい結合を生み出す仕組み，であります．さらに新しい連携を協会内外に広げ，深めることで，更なる可能性が見いだされるものと考えています．会員の皆様には，「当協会の持つ可能性」を改めて認識頂きたいと思います．これは，ある意味で，当協会の存在意義（パーパス）の再認識活動とも言えます．当協会が何を目指そうとしているのか，また，当協会に参加することで，何が得られるのか，を少なくとも協会内で再認識し共有化する活動も必要かと考えています．このような活動は，協会の抱える課題解決の一助にもなると考えています．また，分科会再編の中で，若手フォーラム企画分科会や会員有志によって自由に研究活動を行える研究会制度も立ち上がっていますので，新しい視点で当協会の活力を向上させる新たな提案や要望も，積極的に吸い上げていきたいと考えています．

最後になりますが，会員の皆様とともに，「協会の可能性の再認識」と「新しい結合」により「新しい科学技術の萌芽」に貢献したいと考えておりますので，ご協力のほど，よろしくお願いいたします．